

## 日印コンソーシアムの在り方について考える

田中 啓介

## ＜豊富で優秀なインド人材＞

インドは、従来からアメリカ企業のコールセンターや、諸外国企業にとってのソフトウェア開発やエンジニアリングサービス等のオフショア先として世界的にも地位を確立していましたが、昨今では単なるオフショアにとどまらず、戦略的な研究開発拠点や重要なビジネスモデルの一部として、最先端のIT技術とともに、インド人材を積極的に活用する動きが広まってきているように感じます。

例えば、パナソニックのインド法人では、スマホと連動する物の位置情報を検出する信号発信機「シーキット（Seekit）」を発売すると発表し、インド発のIoT事業を拡大しようとしています。また、某大手会計事務所では、日本に駐在する外国人の日本における個人所得税計算業務を、AIを活用し、かつ、日本の所得税法を学んだ同社インド法人の専属部隊が一括して業務を行っているようです。そして、世界中の統合基幹業務システムERP導入プロジェクトや、海外子会社の管理業務を一括してインド人が担当するなど、インド人が強みを持つ領域については、国を問わず、世界中のプロジェクトにインド人が関わってくるのが当たり前の時代がもうすぐ来るのではないかとさえ感じます。



インド国内のMBAでは最高レベルのIIMB  
インド経営大学院バンガロール校

大ヒットインド映画「きつとうまくいく」（邦題）の映画の舞台としても有名

このことは、実際にインドに住んでいても実感します。毎年大学の卒業とともに150万人を超えるインド人エンジニアが誕生していて、優秀なインド人は年々急増しており、その数は半端ではありません。最近日本で上場したメルカリがインド最高峰の工科系大学であるIIT（インド工科大学）から優秀なエンジニアを大量採用していることがメディアでも報道されていましたが、そこまで最高レベルの大学卒業生でなくても、非常に優秀なインド人エンジニアは多数おり、人材難に直面している日本の特に中小企業にとって、インド人を積極的に活用しない手はありません。



日印デジタルパートナーシップ合意に基づく  
スタートアップハブ・キックオフミーティング

## ＜日印のコンソーシアムを目指して＞

ハードウェアに強い日本と、ソフトウェアに強いインド、事前に仮説検証を行い、計画を立て、着実に物事を進めることができる日本と、一方で、すぐに行動して、どんな状況をも受け入れ、常に前を向いて臨機応変に対応ができるインド、そんな対局にいるような両国でも、自国の価値観や宗教観を守りながら、お互いに相手を尊重し、信頼関係を大切にす文化、商習慣という共通性に支えられて、実はこの両国の相性は抜群であると私は信じています。

今後、日本とインドが協業し、いろんな分野でコンソーシアムが生まれていくことを願ってやみません。